

## JST ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）最終報告会

### 新たなステージに進むために 開催報告

本学は令和元年度に JST「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択され、6 年間にわたり取り組みを進め、間もなく終了しようとしています。そこで、3 月 6 日（木）14 時～16 時 10 分に、これまでの取り組みを総括し、さらなるダイバーシティ推進のための課題と展望を報告する最終報告会を以下のプログラムで開催しました。当日は約 60 名がオンラインで参加し、その様子は長崎新聞、NHK 長崎などでも広く報道されました。

【日時】3 月 6 日（木）14 時～16 時 10 分

【実施方法】Zoom によるオンライン形式

【プログラム】

#### (1) 事業概要とその成果

矢内琴江 副センター長・准教授・コーディネーター

#### (2) 女性研究者たちと考える新しい研究力とリーダーシップ

登壇者：相原希美 助教（生命医科学域（薬学系））、  
宮崎幸子 助教（熱帯医学研究所）、吉田朝美 学長補佐・准教授（総合生産科学域（水産学系））、賽漢卓娜 教授（人文社会科学域（多文化社会学系））、高村敬子 教授（生命医科学域（医学系））

コーディネーター：矢内琴江

#### (3) 病院が挑戦する働き方の見直し

事例報告：薬剤部（大山要 教授・部長／今村政信 主任薬剤師）、麻酔科（東島潮 講師）、  
形成外科（岩尾敦彦 准教授・医局長）

病院長コメント：尾崎誠 病院長

コーディネーター：南貴子 大学病院メディカル・ワークライフバランスセンター長・准教授

【内容】

森口理事による開会挨拶では、本学のミッションであるプラネタリーヘルスの実現の基盤としてダイバーシティ推進が位置付けられ、取り組みが行われている主旨の説明がありました。続いて、矢内副センター長より先端型事業の概要とその成果が説明されました。令和 7 年 2 月時点では、先端型事業で設定したすべての目標値を上回る成果を出すことができたという報告がなされました。さらに女性教員比率に関しては、国立大学協会による「国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第 21 回追跡調査」によると、全国の総合国立大学（女子大学を除く）では 1 位との報告もありました。

続いてのセッション「女性研究者たちと考える新しい研究力とリーダーシップ」では、センターの様々な支援制度を活用していただいた 5 名の研究者を迎えて、研究とライフイベントを両立しながら研究に取

長崎大学ダイバーシティ推進センター  
JSTダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）最終報告会  
**新たなステージ  
に進むために**  
3.6 木  
14:00-16:10  
多様な研究者、医師、スタッフたちとともにふり返る  
Zoom 開催  
参加申込 (3/3締切)  
ご自身のアカウントが  
ない場合はセンターまでお問い合わせください。

Program  
14:00 開会挨拶 森口 理 副学長  
14:05 事業概要とその成果 矢内琴江 副センター長・准教授・コーディネーター  
14:25 女性研究者たちと考える新しい研究力とリーダーシップ  
登壇者 相原 希美 (生命医科学域 (薬学系))  
宮崎 幸子 (熱帯医学研究所)  
吉田 朝美 (総合生産科学域 (水産学系))  
高村 敬子 (生命医科学域 (医学系))  
コーディネーター 矢内琴江  
15:15 病院が挑戦する働き方の見直し  
事例報告 薬剤部 大山 要 教授・部長 / 今村 政信 主任薬剤師  
麻酔科 東島 潮 講師  
形成外科 岩尾 敦彦 准教授・医局長  
病院長コメント 尾崎 誠 病院長  
コーディネーター 南 貴子 大学病院メディカル・ワークライフバランスセンター長・准教授  
15:55 総合コメント 森口 理 副学長  
16:00 全体総括 森口 理 副学長  
16:05 閉会挨拶 森口 理 副学長

り組まれている経験や、学部や大学のマネジメントに関わられている経験から、研究力やリーダーシップ力についてディスカッションしました。宮崎幸子先生、相原希美先生のお話からは、チームで研究を進めていく力や、院生にテクニカルスタッフとしてサポートしてもらうことが院生の教育の機会になるなど、新しい研究力や、若手の育成のあり方が話されました。続いてリーダーシップについて、学長補佐をされている吉田朝美先生や学会など留学生や若手を交えた研究活動を行う賽漢卓娜先生からは、部局や国境を越えた活動がリーダーシップを育成する契機となったことが話されました。また高村敬子先生からは、教授になることがゴールではなく、より研究を発展させていく契機としていくことが重要であるという発言もありました。さらに発表者からは、今後の課題として、女性研究者・リーダーのロールモデルが少ないことや、女性研究者支援の課題を捉える際に、ジェンダーだけではなく、エスニシティや世代なども考慮して捉える必要性などが指摘されました。

「病院が挑戦する働き方の見直し」のセッションでは、「病院の働き方見直しプログラム」に参加した診療科の中から3チームが登壇し、プログラム終了後に取り組んだアクションの事例報告をしていただきました。薬剤部からは、プログラム参加時に始めた「メンター制度」や「シェアシート」の活用例や、育児などによる時短勤務職員の交流会の定期的な開催が報告されました。麻酔科からは、他の国立大学病院と比しても手術件数の多い本学の麻酔科スタッフがその力を発揮できるよう、特定行為看護師や麻酔科専属臨床工学技士へのタスクシフトを進めながら業務の改善とスタッフの意識改革を進めてきた事例が報告されました。そして形成外科からは、現在、若手や学生がもっと形成外科へ関心を持つことができるように始めた取り組みである手術の見直しが紹介されました。頭頸部再建手術は術者にとってはやりがいがあるものの、若手やよく知らない人にとっては手術が長い、きついと敬遠されがちなので、この手術の手順の見直しと手順の定型化によって手術時間の短縮を進めたという報告でした。そして最後に、この取り組みにより若手も中心に主体的に考えていくことができるようになったと話されました。以上の報告を受けて、尾崎病院長からは、病院として取り組まれてきた働き方改革の説明とともに、各部署で取り組みをしていくことでより働きやすい環境ができると思うので、今後も進めていただきたいというコメントがなされました。

以上の成果報告を受け、山村康子 JST プログラム主管から、女性研究者在籍率、女性教授在籍率の高さについては大きな成果であること、5名の女性研究者の発表から事業による支援が有効であったことなど、本事業の成果を高く評価するコメントと、今後ロールモデルの構築が課題である旨の指摘をいただきました。また「働き方見直しプログラム」には、若手が積極的に参画していることが評価されました。この成果を病院だけではなく大学全体、そして全国への波及してほしい旨のコメントがなされました。

最後に永安学長からは総括としてコメントをいただきました。まず5名の女性研究者の発表からは、「昨今の社会情勢が変わる中で、ロー



ルモデルを作ることは難しいので、新しい時代のロールモデルを意識して作っていただいているものとして受け止めました」と述べるとともに、ディスカッションの中で指摘された、様々な意見を出せるようにする必要性については、「執行部として、出てきた意見をしっかり受け止めていかなければならないと考えている」と述べられました。また、キャリアパスの実現、執行部への登用、理工系の女子学生も増やしていくことなども、取り組むべき課題であるとして挙げ、そして男女が同等に活躍できるようにしていく必要があり、ダイバーシティ推進センターが行っている様々な支援制度はこれからも継続させていきたいと述べられました。次に「病院の働き方改革」については、スタッフ全体の改革として取り組まれている報告であったという感想とともに、今後もさらに進めていくよう、大学執行部としても取り組みたいと述べられました。また研究大学としては、国立大学全体で課題となっている博士号取得の増加とも関わって、医師の研究力の向上と、博士号を取得した医師の維持が課題になってくると述べられました。以上の課題を踏まえつつ、「今後もダイバーシティ推進センターを中心にしっかりと歩みをすすめていきたい」という発言と、これまで本事業に関わったすべての方々と JST への謝辞が述べられました。

閉会の挨拶では、門脇センター長が、本事業の成果は学長のリーダーシップ、各部局長、そして全教職員が問題意識をもって取り組みを進めてきた成果であると述べられ、これまで関わっていただいた学内外のすべての方々への感謝の言葉を表しました。最後に「この報告会でいただいたご意見を新たなステージに進むための今後の糧として、今後も精進してまいります」と述べられました。

